

●「ガランス」(福岡県) 17号

同人雑誌で二〇〇ページを超えるポリウムはそれだけでエネルギーを蔵しているものだが、この号は特に力作が揃った。

「労働基準監督官への道」(八谷武子)は、自分史ノンフィクションと呼べるものだが、この事実を素朴に辿っていく筆致は、力がある。生き方そのものに誠実な重みがあり、真の人生の格闘が基盤になっているからだろう。日本の戦後史の一面を垣間見させる労働関係の行政面も窺われ、戦後発足した民主主義体制の良質な部分も期せずして浮かび上がっている。ノンフィクションであるにもかかわらず、逆に運命の不可思議さを表わす文学的な深みも備えているのは、十代のときの易者の予言のままに軌跡を描いていること、追い詰められたとき、ある超越的な存在が、言葉や救いを投げかけてくれるところである。この作品がただ単に単調な人生記録に留まらなかったのは、そういう領域が描かれていることと、何よりもその努力と誠実な姿勢とが貫かれているからだろう。それは文章にもよく表れている。こういう優れた事実記録の重みは、生半可なフィクションの「作り話」をはるかに超えてしまふ。読みごたえのある文章であり、一つの人生の深みを教えてくれる記録である。人間にはある運命に導かれるということが確かにあるものであり、それは苦難を乗り越える前向きな姿勢と努力によって大きな展開を見せる、人生の秘密を垣間見させてくれる。ここには描かれていないが、それは運命の発端となった主人公の父親の死そのものの中に、すでに死を超えた願いとして投げかけられていることも、奥行きを深めている。優秀作である。

「羅生門の鏢」(周防凛太郎)は、特異な題材をよく扱った歴史小説で、ある刀の鏢の異様な魅力に惹かれた若者が、その工匠の門を叩き、弟子入りしてその意匠の秘密に触れる話である。一つのストーリーとしておもしろく読める。ほとんど成功していると見られる。

「長崎、さんた丸や 余間」(加茂宗人)のキラシタンのルートを追い続けて、執念を感じさせる連載には、驚嘆させられる。いつか何かに結実するものと思うが、こういう地味に積み重ねていく記録は同人誌でなければできないことで、今後の継続を期待したい。

小説の「月、犬、そして雨」(古木信子)は、少女の視点による描写に全体を預けすぎていて、物語の展開の乏しさを、その描写が補っていないところに、もう一つ小説世界が立ち上がってこない恨みがある。冒頭はよく、描写力も感じられるので、構案を志向していけば、いい作品世界を形作れそうに思う。

「文学岩見沢」(北海道) 80号
今号は80号の記念特集号で、小説、詩、短歌、俳句、川柳と掲載に名を連ねた数は一〇〇名を超える。記念号ならではの賑やかさで、多彩な誌面作りが市民参加の色合いを華がせている。

「春宵」(寺田文恵)は端正な文章で、鍛え上げられた表現は見事である。ある手紙で誘われて昔を思い出しての故郷帰郷旅行が基軸だが、整った文章の緊張感が、最後まで持続していて、快い。失われたとばかり思っていた過去の空間だったが、現在料理店として蘇っている蘇生感が時間の豊かさをもたらして、ふくよかさを備えている。佳作。「与庵庵」という料理店の名前を様々に解釈し合うところは鮮やか。老年になって逆に豊かになるものは過去と記憶であり、三十年を思い浮かべて自由に往復できる特権は、五十歳を超えてからのもの。この特権の中の豊かな空間と団欒がこの小説の舞台であるなら、タイトルは「与庵庵」にしたほうがよかったか。「よいあん」というひねったタイトルも可能だったかもしれない。

「市来知の決闘」(こう でんじつ)は佐賀の乱を扱った異色時代小説。文章は荒っぽくこつこつとした野性に富んでいて、けつして滑らかではないが、史実に即した実直な筆致は、過去のそれぞれの人間を生かして躍っている。連載で、今回は佐賀軍の志波原武右衛

門と羽根武右衛門の二人の英雄の最期を中心に書いているが、武人の気骨はよく伝わってきて、佐賀の乱の細部が現代に蘇ってくる。志波原武右衛門が官軍に向けて最後に斬りこんだのが、見玉源太郎で、見玉の肩を斬りつけて重傷を負わせたことは、この作品で初めて知った。見玉源太郎は薩英戦争でイギリス軍と戦った一人であり、のち日露戦争で旅順攻略に大役を果たした帝国陸軍の英雄である。彼ら武人の妻もよく伝えられているし、その家人など周辺の人間もよく伝えていて、その効果で、こつこつとした粗野な文章の中に現在と繋がっている日常が感じられ、風紋のような味になっている。

「記憶 林檎の木の下で」(電肝一二美)は痛でホスピスに入院した主人公が最期を迎えるストーリーだが、最期に混濁した意識の中で自分が少女の頃遊びの紛れで従兄弟を殺してしまった記憶に辿り着く。痛末期の意識と、過去の贖罪の意識とが交わっていきそうに交わってこないところに歯がゆさが残るが、どちらもひきつけられるテーマで、興味深い。題材を捉える嗅覚に、珍しく鋭敏なところが感じられる。

蛇足。この「文学岩見沢」だけではないが、多く見られて気になるのは、小説が「創作」とジャンル分けしていることだ。小説だけが創作ではない。詩も、短歌も、エッセイも俳句もみな創作であり、作者のオリジナリティの表出であることに変わりない。商業文芸誌講談社の「群像」もタイトルの上に「創作」と付けてあって、誤りをおかしている。小説だけが特権的文芸ジャンルではない。こんなところにも商業文芸誌の編集の衰退が窺われるが、同人誌諸氏がこの誤りを踏襲してはならないだろう。さらに付け加えれば柱も本来左ページ上にあるべきで、下のページルビの横にあるのは見にくく、おかしい。文藝春秋の「文藝界」など若いレイアウトデザイナーが奇を衒っておかしなところは付けているのを、他の誌が追従して真似ているのは、権威に対して右へならえの日本文化の奇妙な点

が、実は真の工匠は老婆だったという最後の部分は、略しすぎる。ここに、その意匠の秘密——なぜその異様で魅力ある意匠が生まれてくるのか、その老婆の生き方や人生観がどのように結びついているのか、そこまで降りていけば、一つの芸術観、刀剣芸術の真髓にまで迫ることができたように思う。そのうえで老婆を殺したなら、工匠の跡を真に継ぐことになっただろう。老婆と明竜の特異な関係にも隠された部分がありそうである。それらを捉えれば、さらにタイトルも変わってきただろうし、「羅生門」という芥川龍之介の小説作品によりかかっている印象も払拭できただろう。「安達原」に出てくる鬼老婆も、「羅生門」の老婆も、ただ鬼に追いやられているだけで、その過程の苛酷な人生は覗かれていない。この小説はそこに踏み込める部分を備えているだけに惜しまれる。

「霧の扉」(鈴木比喩子)も中篇の力作。前妻の二人の子と後妻である自分の立場とが軸になっており、特に性格の合わない義娘との確執が女性の心理の深さを垣間見させている。書き慣れた達者な筆使いでその点はある程度成功しているし、伝わってくる。しかし、結婚して出て行った義娘がアメリカで夫のDVで離婚することになると、読者の興味はむしろそのDVの方に引き寄せられ、確執が覆われてしまう。もし女性の怨念のような領域に結像させたのなら、DVに堪えたその理由のなかに、主人公の「佳子」への憎しみまでも加味したら、もっと凄みが出てきただろう。タイトルに関しても、もっと前に霧を出しておけば伏線になり、奥も出るのに、最後になって霧が出てくるなど、ストーリーの組み立て順序に工夫がほしい。またアメリカから帰国して離婚交渉に臨む夫が突然義娘を殺してしまうのも、あまりに突発的すぎる。筆はかなり立つので、ちよつとしたことが優れた作品に結びつくことがありそうな書き手である。

福岡にはこの「ガランス」をはじめ、「九州文学」「午前」「南風」「季刊午前」「海」「海峡派」「久留米文学」

「周炎」「現実と文学」「胡壺」「照葉樹」など、充実した同人雑誌がいくつももある。一つの隆盛を誇っていると云っていい。何か生まれて来そうな文学土壌を感じる。

●「季刊午前」(福岡県) 41号

相変わらずセンスのよさの際立つ誌だが、今号は詩のほうが目立った。「回帰」「ソネット」(井本元義)、「三角定規と裁ちばさみ」(脇川郁也)など、凝縮された言葉には、確かに鋭さがある。本当の弾丸となって胸を撃ち抜くには、もう一つ起爆力が弱い感じもするが、レベルの高い詩群にはちがいない。

吉貝甚蔵氏の評論「視点としての『四千の日と夜』」は、「風の出自をたずねる」という書き出しで始まる流麗な文章で、「戦後詩の始まりを告げたといわれる詩集『四千の日と夜』」を再考することによって、「世界を内在化することの必然」に立ち戻り、「世界を詩の世界で奪還し、詩を屹立させる」ことを洗い直している。流れのよい、わかりやすい評論だが、これを今、詩の源泉としてもう一度振り返るには、その必然性がもう一つ弱い気がする。洗い直すことによって何が生まれてきそうな気配はない。さわやかな作品の風として流れてはいても、ここから新しい力のある詩が誕生してくる構造は見えない。ここにある言葉は、風の美しさのなかに封印された言葉だ。むしろこれを論ずる筆者の視点には、この世界のあらゆる残酷さや、不条理を、一つの幻想のなかに閉じ込め、日常の生活アクセサリーのなかに飾りおく詩の作用が示されるが、その逆の可能性を隠している。吉貝氏の詩の力は、世界の暴虐や矛盾のなかに踏み込んでいけばいくほどその効果を發揮することになるが、それに耐えうるにはあまりにセンスイティブすぎるかもしれない。美しさに逃れるベクトルと、矛盾の世界への抗議のベクトルと、その交点にこそ、この場合の詩の源泉がありそうだが、そこまで踏み込んでいくには、整いすぎている何かが邪魔をしているという印象を抱いた。

である。

●「サロンド・マロリーナ」(東京都) 創刊号

若い人ばかりの同人誌。「ネット」で知り合った創作仲間が集まり「作った創刊号。若さを表出して情熱の迸る誌になっている。「同人の設立趣旨に代えて」として「作品を発表すること」を次のように記している。「なぜ作品を発表しなければならぬのか。それは作品は世界と共に鳴させなければならないからだと思われまふ」「作品は、書かれただけでは半成りで、世界へ解き放たれて、人々に読まれて、人々の心の中に文学が生まれて、そこではじめて完成品になるような気がするからです」「僕は、自分の小説をだれかに読んでもらいたい、読んでくれた人の心をスパークさせたい、僕は世界が欲しい」「たとえ笑われようとも、自分の書いた小説を『発表』してみたい、世界へ問うてみたい、そこから新しい何かが生まれるかもしれないと思うようになります」——ここには文芸の純粋な動機があり、確かなエネルギーがある。同人雑誌をやるだけれども、この震えは持っているはずで、あらためてこういう基本の精神を提示してくれただけでも、新鮮な意義を覚える。

巻頭小説「革命、憂国、あるいは、太陽」(竹内みちまる)は鬱屈した現代の学生生活を辿っていると読



み進めていたら、どんどんイギリスに飛んでいってしまおう主人公の行動力に感心させられた。アルバイトをしてお金を貯め、すぐにイギリスへ飛んでそちらで小説世界も展開していく現実の発展力は確かに若さを遊ばせていて、気持ちがいい。反イギリス闘争を続けるアイルランドの空気を肌で感じ、イギリスの歴史を身で覚えるその感覚の中に、新たなものへ向けてのエネルギーの燃焼を閉ざされている日本の現実をより明確に感じる。旅の終わりにイギリスの老紳士との会話の中で、それが弾ける。「日本は目標を失っている。多くの若者は自分が何をすべきかを見つけれない。犯罪率も上がっている。経済は泡が弾けるように崩壊した。所得格差が急速に広がっている」「今、何をなすべきかわからない。そのために人生をささげる何か欲しい。それさえあれば、この命を捨てられる。でもそれがどこにあるのかわからない」

「心に願っていることは言い尽くしたと思う。老紳士はコーヒークップを置いて、身を乗り出してきた。膝の上に置いていた手のひらをつかまれた。太い指先はしわだらけでふやけた皮膚が硬くなっている。有無を言わせない力で胸に押し当てられた。

「君が探しているものはここに」老紳士は驚いているこちらに言い聞かせるように告げてきた。そのままでの姿勢で、一生懸命勉強しなさいと続けた。

何もかもが足らないのだ。考えることも、汗をかくことも、世界を見ることも。胸から放した手を目の前に持ってきて、力のかぎり、こぶしを握った。爪が食い込んで、手首が震える。もうこれ以上、力を込めていられないところまで固くしてから、広げてみた。血潮が走る。この手で何かをつかむことができそうな気がした」

二〇〇枚近い力作には、ストレートに伝わってくるものがある。

この誌の他の作品も「空襲警報」(中村鷹一郎)など、平成の現代に空襲が起こるとして自衛隊を交えながら

うな感覚は広大な宇宙感覚に包まれる。拍手を送りたくなる冒険紀行だ。

エッセイ風にちりばめられた短文もいい。「鉛筆／長いこと鉛筆を買わない。では、使わないかという、毎日使っている。メモ書きなどに使う。バッグに入れてあるものもある。／頭の一辺を削り生地を出して、名前を書いてある鉛筆。筆箱に入って小学校に通った鉛筆。なんて長持ちするんだろう、子どもたちはとうに果立ったが、鉛筆たちは、あれから何十年も私のまわりをコロコロしているのだ。元気がいっぱい」――雑誌全体に、年齢を超えた新鮮さがある。

●「南風」(福岡県) 26号

「南風」は安定したレベルの作品が揃っている。今号は特に女性の書き手が連なった。どの作品も読ませる。巻頭の「ミッドナイト・コール」(和田信子)は特に現代的な仕事で老年の境遇とうまくマッチしている。一つの世界を醸し出している。大腿骨を折った妻が入院してこれから手術を受けるといふ時、夫が交通事故死。動けないので便利屋を頼んで全部処理してもらおう。便利屋にすがるといふ身のはかなさが、よく出ている。もともと行方不明の息子を待ち続けていた夫婦。夫は息子を捜しに行った結果交通事故、どこまでもついている人生だが、お金の関係の便利屋に、寂しさを紛らわせるために、深夜の電話を頼む。毎晩、分単位の料金を取られながら、だんだんしかし感情が繋がってきて、人間の心理が絡み合う。その便利屋は意識を失ったままの妻を介護しながらの仕事。しかしその妻も亡くなる。孤独の中で引き合い、慰めを呼び合う結末がほの暖かい。行方不明や病院生活、人頼みの葬式。老後の孤独や看病など、現代生活の空虚な模様を周囲によく配置して、老いの孤独を浮かび上がらせている。優秀作に推したい。

●「季節風」(東京都) 107号

「季節風」は一九五三年創刊だという。六十年近い誌齢は驚嘆すべきもの。六〇ページの薄さだが、濃い、

描く着想も新しく、どれも若々しい刻印がある。期待できる誌である。

●「仙台文学」(宮城県) 75号

「仙台文学」は歴史を扱う書き手が豊富で、この領域には厚い層を誇っている。「氾濫」(佐佐木邦子)、「金売吉次のふるさとを訪ねる」(石川繁)、「睡竜立てり―仙台藩戊辰譚―」(近江静雄)、「大堤」(安久澤連)、「英雄互いに黙契す―仙台維新前夜譚―」(牛島富美二)はどれも歴史の流れに依拠した重厚な作品である。土地に根ざした記録を丹念に拾う実直な姿勢は刮目すべきものがある。これだけの歴史作家を連ねた同人誌は他にないだろう。

なかでも「氾濫」は、北上川に繰り返される堤防の決壊によって慢性的な貧困に喘ぐ農民の姿を克明に描いて、この時代の農民の根底的な苦しみを人間の生きる叫びにまで引き絞って震わせている筆致はすばらしく、心を揺さぶられる。貧困とはこういうものであり、土地に生きるものの悲劇とその苦しみ、赤裸々な根を存在の絶唱として響かせてくる文章の力は感動に満ちている。優秀作である。長編になりそうな気配だが、もしこれが長編小説として結実したら素晴らしいものになるだろう。大いに期待したい。

現代の素材を扱った「二十四色のパステルとスケッチブック」(渡辺光昭)もいい。「てんぼう」と呼ばれる左手不自由な少年のコンプレックスを描いた作品だが、足の不自由な絵描きとの出会いで、一つの「乗り越え」を得るストーリーは、ともすると型にはまりがちな題材だが、筆者はヒューマニズムに流れずに、しっかりと体でぶつかる対決の姿勢を崩さずに描き切っている。それが快い読後感を醸し出している。佳作である。

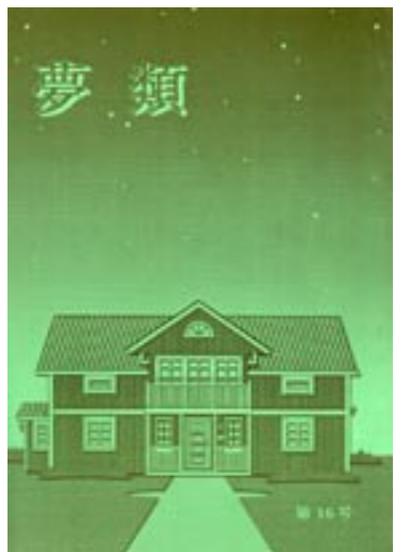
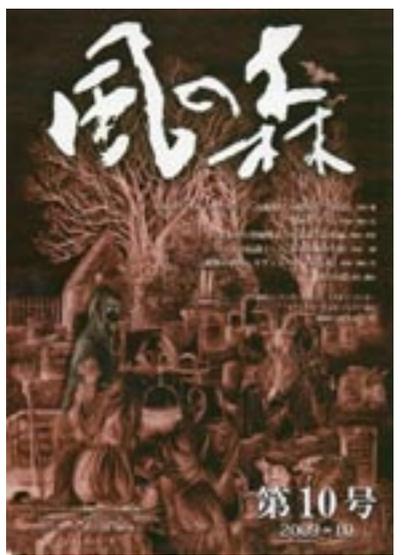
●「夢類」(神奈川県) 16号

この誌の「飛んでる」加減は比類がない。同人雑誌のおもしろさを一五〇%発揮している。仲間雑誌を出すことの楽しさが溢れている。同人雑誌を読むこと

含蓄のある不思議な味わいがある。ニヒルというか、突き放した虚無感のような漂っている。「つかみそこねた爪痕」(一尾卓)にも、そんなトーンが全編に漂っている。また、丹羽文雄主宰の「文学者」の編集をやっていた花村守隆氏の回想「晴美 多恵子 寛子と私」は、同人雑誌時代の瀬戸内晴美、河野多恵子、竹西寛子の姿が伝わってきて、興味深い回想になっている。丹羽文雄の「文学者」が発行されていた頃は、同人雑誌から芥川賞への道もすっかり切り開かれていた。その時代の同人雑誌の息吹が伝わってくる貴重な回想だ。歴史を持つ同人雑誌ならではの回想は、ぜひ大事にしておいてほしい。同人雑誌にはそれぞれのトーンがあり、不思議に一貫したものが流れている。人の集まりの色彩というべきか。「季節風」にはそれが長い年月を経た味わいととも、いままも色濃く残っている。

●「風の森」(東京都) 10号

「風の森」は表紙もレイアウトも、美術意識が一段と高く、きれいなつくりになっている。書店に置かれても、すぐ手に取りたくなるような、魅力の溢れた装幀である。各ページの上部飾りも作品に合わせて美しく彩られている。表紙も、裏表紙も、アートギャラリーとなっていて、まず絵で楽しませてくれる。現



この喜びの一つは、こういうものに触れていく楽しさでもあるだろう。これはおそらく全部手作り。イラスもレイアウトもほっこりしたあたたかい肌触りがある。同人は三人だけのようだが、今号は女性二人がタクラマカン砂漠を突っ走った紀行文「空へ タクラマカン 女二人旅」(金子恵子/河合泰子)にびっくり。たんなる観光ツアーなんかの紀行文ではない。中国大陸西部を中型トラック日野レンジャーで自分たちで車を運転して縦横に走り回った、痛快本物紀行。しかも突っ走る女性二人の年齢は七〇歳と七二歳。七〇歳のケイは白血球が足りなくなる病気の持ち主、七二歳のヤスコは膀胱半分、脾臓、胆嚢を摘出した「満身創痍のサイボーグ」。このお年でこれをやるか、という驚きのタクラマカン女二人旅。「砂漠の真ん中で満天の星を眺めたい」という単純な動機から、一気に車を大陸に移して、中国免許に書き換えて走り行く大胆さは、「地球の歩き方」の比ではない。まさに「痛快まるかじり」。砂漠のなかで弾きたいとチェロを持っていくが、いざ星空の下に取り出してみると音が出ない。なぜか見ると砂がいっぱいに胴の中に溜まってしまっていた。「砂の詰まったチェロは砂漠さまへ置き土産にしよう」と置いていく。この発想もにくい。車が砂に流されそうになったり、砂に洗われ、浄められるよ

代の同人誌という前進的な姿が強く印象に残る誌である。

エッセイなど銀座の酒場の話、カフェや酒の話などがこの号では多く、銀座の歴史の一面も知られる。高い趣味の文章、作品が並んでいるが、なかでも「路上の鈴」(遠矢徹彦)は文章の彫琢の華麗さにおいて圧巻である。今日これだけの文章を書ける作家は稀だろう。流麗な文体の底に、暗い響きが流れていて、それが二重奏となって深い陰影を醸し出している。その陰が苦い残滓を引き摺り、抑制の効いた言葉の強い緊張感の中に、この世界の儚さやもろさを水中花のように浮かび上がらせてくる。愛惜に満ちた青春の追懐は、それだけにとどまらず、人生の深さへと滔々と流れ込んでいく暗い大河を思わせる点において、この小説は読む者一人一人の胸の底の傷に共鳴してくる。これだけの彫琢を完成した遠矢氏に拍手を送りたい。団塊の世代の一つの「形」にもなりえている。優秀作である。

●「九州文学」(福岡県) 53号

「馮依譚」(田部浩二)は鍛錬された文章の安定感が抜群で、淀みなく読ませる筆力は同人雑誌のなかではトップレベルだろう。盲目につけこまれての妻の不倫を恨んで死ぬ男のたたりが、その後どう出てくるかという、文字通り怨恨の馮依を表した小説だが、吸引力に比べて読後感がもう一つなのは、怨みの深さが、あまりに執拗すぎて、そこまで現実に影響を及ぼすことができるのだろうか、という疑問が残るからである。例えば片腕を切り取られて殺された者がいる場合、霊の報復として、片腕以上の加害の報復が可能であるのかという疑問である。エネルギーの等量性は存在しないのか――これはまた別な領域であるので、詮索は差し控えるにしても、そこには一つの秩序が存在するようには思える。文学はこの領域に一方では足を着けておくべきだとは思ふものの、それだけを中核に持つてこようとすると、逆に何か失われてしまう気がする。この小説の結末に、半分は頷きながら、半分は頷き得

ないのは、この捉え方では一つの方向を示しえないからである。負の世界は確かに見える。しかしではどう生きればいいのかという、この世界を進む者への反映がなされてこない。世に残るほとんどの怪談は田部氏が示すこの領域である。それらにはしかし我々の中に食い込んでくるもつと積極的な生への照射がある。我々の足を脅かすものがある。ここをしつかり組み込んでくると、田部氏の小説はもつと大きな力を得るだろう。

「母に出会う日」(林由佳莉)は、前号に続いての時の跳躍的な結節を扱っているが、前号のものの方が、鮮やかな印象があるのは、主人公の生き方に、積極性が伴っていたからだろう。自分が変わるといふこと、社会を前に、そこへ自分が踏み出していく扉の意味が付与されていたことに、「扉」を開ける光の領域がうまく流れ込んでいたのに対し、今回は母親とのメビウスの帯だけに限られてしまっていることが、わかりやすくはあるがその新鮮さを減じさせた。前半の文章はとってつけたようなぎくしゃくした無理な力が入っていて、流れも悪い。冒頭の一文に「公園」が三つも出てくるような表現はもつと推敲すべきだろう。若い作家は編集者をもつと鍛えてもいい。

「ある男の軌跡」(波佐間義之)は、浮浪者に至るまでの道筋を扱っていて、密度のある文章で手応えを感じさせるが、結末で急ぎすぎた点が惜しまれる。炭坑の斜陽の時代と、その後の出稼ぎのタコ部屋的集団閉鎖労働は、強リアリティを持っており、説得力がある。こういう労働の世界は存在しただろうし、現代でもありうる。いわば陸の「蟹工船」といふべき世界だろう。この部分はとてもよく書けている。しかし傷痍軍人の真似をして稼ぐことを導かれた鳥山の死以後は、話がぼんぼん飛んで、まとまりがつかなくなっている。はしより過ぎが目立って、それまでの小説世界は何だったのか、あっけなく感じられてしまう。「ある男の軌跡」というタイトルも一般的すぎて、内容が



手マスコミだけの力に依存せず、自らが選び、自らがその価値を主張して世の中に訴えていく能動性が重要であるだろう。そのことを「北斗」の諸氏は理解してくれているように思う。ありがたい特集だった。●今年是全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」公開選考会は、十月三十日・三十一日四国の徳島県三好市の全国同人雑誌フェスティバルのなかで第二日目に開催される。その公開選考会に候補となって参加者に読まれる小説作品を、厳選する時期が近づいているが、今回も推薦したい優れた作品があった。優秀作は「ミッドナイト・コール」(和田信子)「南風」26号、「もう一つのドア」(中山茅集子)「クレーン」31号、長編部門に属するかもしれない「氾濫」(佐佐木邦子)「仙台文学」75号「路上の鈴」(遠矢徹彦)「風の森」10号の四作。またノンフィクションとして「労働基準監督官への道」(八谷武子)「ガランス」17号、評論部門としては「井上光晴論ノート」(和田伸一郎)「クレーン」31号を挙げたい。準優秀作は「羅生門の罅」(周防凛太郎)「ガランス」17号、「春宵」(寺田文恵)「文学岩見沢」80号、「市来知の決闘」(こう)でんじつ「文学岩見沢」80号「革命、憂国、あるいは、太陽」(竹内みちまろ)「サロン・ド・マロリーナ」創刊号、「馮依譚」(田部浩二)「九州文学」530号、「ある男の軌跡」(波佐間義之)530号、「二十四色のバステルとスケッチブック」(渡辺光昭)「仙台文学」75号「空へ」タクラマカン 女二人旅」(金子恵子)河合泰子「夢類」16号)

鋭い批評精神なしには収斂されないものだろう。井上光晴の言動・パフォーマンスを含めて全体像を解析しようとする方向性も、井上文学への深い追懐に裏付けられての強力な志向になっている。ここまで造形できる評者は希有に思える。筆者がもともと井上が残し、晩年の主要活動舞台だった「文学伝習所」の塾生だった背景もむろんこの情熱の支えになっていることはまちがいないが、その上に立ってなお、冷静に鋭い批評を向ける眼差しは、訝えわたっている。筆者でなければ書けない優れた評論になっている。これを読んでもう一度井上の作品に触れようとする者も少なくないだろう。個人の情熱と組織との間の角逐は、現代ではさらにグロテスクな展開をもつて立ち現れてくる問題でもあるはずである。

●「北斗」(愛知県)564号 この号は大西亮「カプセル・タイム」まほろば賞受賞特集となっていて、大西亮「まほろば賞受賞前後」や、「文学賞選考会の私見」(尾関忠雄)など一〇名による文章が集められている。同人雑誌の優秀作を同人雑誌作家自らが批評し、最優秀作を選ぶ公開選考会の意義が尾関氏などによりよく捉えられていて、まほろば賞も一歩また前進し、全国の同人雑誌諸氏の中に浸透できた実感を与えてくれる。これからの時代は、大

すぐわかってしまい、象徴としてのインパクトは乏しい。導入の部分ももつと切れが必要だろう。締切を意識しすぎた印象がある。

●「群系」(東京都)23号 「群系」は評論がメインの同人誌。毎号意欲的な特集を組んでいる。今回の特集は「生誕百年の作家たち」とII「私」の好きな詩」で、特にバラエティに富んでいる。「生誕百年の作家たち」は、太宰治、大岡昇平、植谷雄高、中島敦、松本清張、菊岡久利、野上彰をそれぞれの筆者がそれぞれの角度から取り上げていておもしろい。新鮮な切り口もたくさんある。大岡昇平の出版時に焦点を当てた「大岡昇平生誕百年とスタンダード」(関根誠)、太宰治嫌いだつた三島由紀夫と並べた「太宰治と三島由紀夫」(佐藤隆之)など多彩で、批評の塩味が味わい深く楽しめる。II「私」の好きな詩」も、萩原朔太郎、伊東静雄、金子光晴、北川冬彦、吉本隆明などそれぞれに詩的体験を捉えているが、あまり多くのほつてこない詩人にも光が当てられていて、興味深い。「石原吉郎/悲しみはかたい物質だ」石原吉郎の一行、そして「(間島康子)などシベリア抑留の体験を重ねての論及など納得させられるし、在日韓国人詩人「尹東柱という詩人」(勝原晴希)に論及しているのもよく見ていると感心させられる。「伊藤桂一」の詩集——詩集「竹の詩想」を軸として「(野寄勉)もおもしろいし、「蒲原有明」詩的完成」という逆説(野口存彌)も優れた展開を示している。これだけの批評を集めるのはたいへんと思うが、基盤になる批評家の集団にほぼ強固なものがあるのだから、充実した批評同人誌であると思う。これだけの人材がいるのなら、現代の作家の批評も、一人か二人に絞って厳しくやってみてほしい。もつと現代にたいしても批評の刃を研ぎすませて容赦なくやってみてほしいと、さらに先鋭な批評同人誌となるだろう。

●「クレーン」(群馬県)31号 「もう一つのドア」(中山茅集子)は人工膀胱を着け

た夫を病院で付き添って見る主人公の女性としての生存感を構造的に描いた作品である。まちがって入った隣の病室で女性が胸を露わにして患者に乳房を吸わせている。病人と付き添い女性のセックスの有様を目撃して、そこに病院という死と直面する空間での対極的な性の行為に、むしろ生きる力を内部に確認していく鋭利な小説である。病や死や老衰への生存の不安が、逆に性のなまめかしさによって打ち消され、未来への力になっていく過程が秀逸である。シベリアの抑留を想わせる戦争のイメージがちりばめられているのも鋭角的象徴になっている。「虫になった男たちは今も記憶の暗闇に生き続ける。夫の画室や古い病院の一室で。又も目をそらしたとき、枕に絡まる髪の毛、長い栗色の髪とぬめるような黒い髪が、交尾の蛇を思わせて立ち上がる」という描写は優れている。緊張感のある文章の切れ味は抜群で、省略され抑制された言葉のなかに、深い思いがしつかりと閉じ込められている。以前「まほろば賞」優秀賞になった「魚の時間」よりも、文章の切れにおいてはこちらのほうが鮮やかだろう。優秀作である。断片ではあるが、戦争をこういう女性からの生々しい捉え方をする面でも斬新に映る。

「朝が怖くて」(もろひろし)は、会社の倒産に追い詰められていく経営者とその家族の圧迫感にリアリティがある。現在社会に広がっている企業倒産の家族としての実感はこのようなものだろうという側面において切迫感よく伝わってくる。文章は稚拙で、文芸としての表現はたどたどしいが、毎月の支払いに追われる家族の差し迫った状況はよく伝わってきて、その面からの緊迫感も漲っている。

和田伸一郎「井上光晴論ノート」は、出色の力作評論。ここには井上光晴の文学的出発が丁寧に解析されていて、批評としても評伝としても、わかりやすく井上光晴の人間像を浮かび上がらせてくる。様々な文献も、それぞれを批判しつつ時代に合わせた的確に引用してくる手腕は、井上文学とその生き方への愛惜と、

●●●同人雑誌の声●●●

編集後記より

▼「限界集落」という語がある。六五歳以上の人口比が五〇%以上の集落を指す。長野大学の野見教授が一九九一年(平成三)に提唱した概念である。さらに高齢化が進めば、超限界集落となり、ついには人口ゼロの消滅集落となる。夕張は六五歳以上比率が四一%を超え、市でももつとも高齢者比率が高く、財政再建の前に、消滅するのではないかと危惧されていた。しかし、夕張市のみならず全国を眺めれば、二〇三〇年には一四四自治体が限界自治体に陥るといふ統計がある。そこから町村合併という苦肉の策が生まれたが、焼け石に水の観なきにしもあらず。孤独死、一家心中、あるいは殺人を伴う犯罪の増加が報じられている現在である。

▼小誌の誌歴が北海道で一番長いと言われている。長ければいいというものではない。それだけ老いたとも言える。一時「限界同人誌」の様相を呈し、私は、いつ廃刊するかを考えていた。そんな状況の中で、新たに同人、誌友の加入があった。旧同人の奮起もある。一時中断した「同人雑誌評」も根保孝栄が引き受けてくれた。廃刊の語が頭から消えてしまった。傘寿を迎える直前の私だが、いつしか(死ぬまで続けてやろうか)という気持ちになった。(人間像)北海道/F)

MAGAZINE VOICE

